

科学技術リスクへの人々の価値意識と原子力リスクコミュニケーション

Social value-orientation for science and technology, and nuclear risk communication

*桑垣 玲子¹

¹ (一財) 電力中央研究所 社会経済研究所

電力消費地である全国の大都市圏に居住する一般市民を対象に、科学技術に対する考え方に関する先行研究等を踏まえた 29 の調査項目から複数の分析手法を用いて、リスクに対する受けとめ方を軸に 4 つのクラスタを抽出した。この結果と年代、性別、関心などの特徴と共に、原子力発電利用に対する考え方等を分析した結果の一部を報告する。

キーワード：社会意識，リスクコミュニケーション，科学技術リスク

1. 緒言

科学技術に対する考え方では、専門家と一般市民の違いや専門分野の異なる専門家間での違い（土屋・小杉,2011）、東日本大震災後の考え方の変化（小杉,2013）を報告してきた。また、原子力世論を構成する社会的な価値観として、科学技術リスクの受け止め方と関係があることも複数指摘されてきた。電気事業者が進めている原子力のリスクコミュニケーションにおいて、日々のマネジメントを通じた地道な信頼の獲得は不可欠であるが、現在のように社会的な信頼が低下している状況下では、個々の一般市民がどのような価値の尺度を持って判断を下しているのか（価値意識）を踏まえ、異なる価値を重んじる人々との共考、あるいは価値共有による信頼の構築も重要となる。

2. 調査結果

2-1. 調査概要

全国の大都市圏の居住者を対象に、科学技術及び原子力発電への関心や考え方、利用態度などの把握を目的として、ネットリサーチ会社に登録するモニターから 20 歳以上 80 歳未満の男女で均等割り付けを行い、3,840 サンプルを回収した（2018 年 2 月）。

2-2. 科学技術リスクへの人々の価値意識の分析

科学技術の必要性、制御可能性、リスク態度を被説明変数としたクラスタ分析の結果から、①利便性を強く認識し、効力感を持ち、利益があればリスクを受容する人々（科学信頼群、2 割程度）、②態度を保留する人々（態度保留群、3 割程度）、③効力感が低く懸念は強いものの、利益があればリスクを受容すべきとも考える人々（譲歩群、3 割程度）、④懸念が強く、リスクがあるものは使用すべきではないと考える人々（懐疑群、2 割程度）、の 4 群を抽出した。

2-3. リスクの対処への異なる価値意識（リスク観）を持つ人々の特徴と原子力発電への態度

懐疑群は年代を追うごとに割合が増加し、社会関心が高く、環境や次世代影響、公共の福祉を重視し、倫理観が高い。若い世代には科学信頼群と態度保留群が多く、社会関心が低く、経済性（価格）や自己の生活を重視する。譲歩群はどの立場も追認する中庸の曖昧さがある。原子力発電に対しては、必ずしも懐疑群のみが特異な懸念を持っている訳ではなく、重視する評価ポイントや有用性・不安感において、他群も同じような否定的な意見や懸念を持っている。

3. 考察と課題

科学技術に対して、好ましい影響を導く経済的な利点と、好ましくない影響に及ぼす倫理的な懸念を、異なる価値尺度で判断する人々が存在している。リスクコミュニケーションにおいては、どちらか一方の観点のみではなく、両者の判断を裏打ちするような科学的な確からしさをもち、リスク評価や管理方法の検討が行われることが望ましい。

参考文献

[1] 土屋智子，小杉素子，市民と専門家のリスク認知の違い，電力中央研究所報告 Y11003, 2011.

[2] 小杉素子，東日本大震災後の人々の科学技術に対する考え方の変化，電力中央研究所報告 Y12010, 2013.

* Reiko Kuwagaki¹

¹ Central Research Institute of Electric Power Industry, Socio-economic Research Center